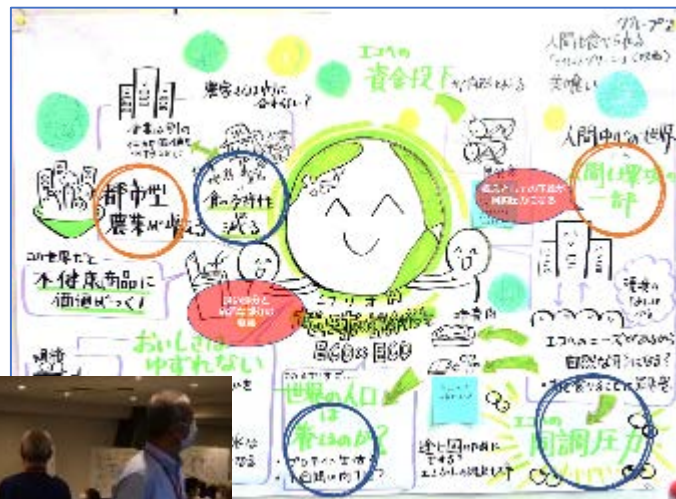


○ 未来デザインWS（双方向コミュニケーション）

- ・農業や食料の未来について考える**参加型ワークショップ**
- ・全国各地より、**10～60代**の様々なバックグラウンド（高校生、大学生、教員、会社員、自営業等）をもった方々とMS目標5のプロジェクト責任者を含めた**全34名**で、「**農業や食料の未来のあるべき姿**」を共に考え、**グラフィックファシリテーション**の手法でとりまとめ（2022/6/26 TKP東京駅カンファレンスセンター）。



○ 成果報告会

- ・全8プロジェクトの成果を広く発信（オンライン会議併用、710名以上参加）
（2022/8/31 東京国際フォーラム）
- ・講演資料や講演動画等をHPで広く公開



<TV>

メディア

ONHK ニュース6～アブの家畜化に向けて効率的飼育化（2022/11/19）

アブを餌に魚を養殖 将来の食料確保などに期待～（由良PM）

ONHK 未来にドクン～10年後の食卓想定技術可能性（2022/11/19）

フードプリンターで寿司ネタ作成、試食～（中嶋PM）

ONHK ニュースウオッチ9～牛メタン削減と地球温暖化（2022/11/17）

COP27閉会、温暖化対策としてのメタン削減取組～（小林PM）

ONHK Eテレ サイエンスZERO

～「もうムシできない! “昆虫食”が世界を救う」（2022/2/6）

昆虫食の可能性や課題を紹介

～（由良PM 鈴木PI）

<TV>

メディア

○OTOKYO MX 「田村淳の訊きたい放題！」（2022/5/7）

近い将来食料危機が世界を襲う？タンパク質危機と注目されるフードテック、
代替タンパク質やフードテック等について解説
～（竹山PM、下川PI）

○北海道放送 「今日ドキッ！」～1.5℃の約束 牛は悪者じゃない！げっぶを退治せよ 2022/11/15）～（小林PM）

<書籍出版>

○「ウシのげっぶを退治しろ」

（2022/11/10発行、大谷智通著、小林泰男監修、
旬報社、1,760円（税込））
地球温暖化の仕組み解説から、牛のげっぶ研究意義を力説。
今後の社会を支える「中高生向け」仕様。



目標 5

プロジェクトに関する評価 (ステージゲート評価)

「ムーンショット型研究開発制度の運用・評価指針」の評価の視点に沿って外部評価（プロジェクトに関する評価、プログラムに関する評価）を実施

プロジェクト評価、プログラム評価を行った外部委員

石田 典子	水産研究・教育機構水産技術研究所 研究員
井出 留美	株式会社office3.11 代表取締役
川越 義則	日本大学 生物資源科学部 准教授
川島 知之	宮崎大学 農学部 教授
久留主 泰朗	茨城大学 理事・副学長
黒田 健介	スクラムベンチャーズ プリンシパル
齋藤 雅典	東北大学 名誉教授
佐藤 繁	岩手大学 名誉教授
高木 睦	北海道大学 名誉教授
竹本 彰吾	有限会社 たけもと農場 代表取締役
中野 栄子	日本経済新聞社 メディアビジネス シニアエディター
西出 香	TNO[オランダ応用科学研究機構] Business Development Manager
沼田 英治	京都大学 人と社会の未来研究院 特定教授
波多野 隆介	北海道大学 名誉教授
早川 典重	株式会社 羽神の森 代表取締役
松本 浩平	オイシックス・ラ・大地株式会社 取締役
百瀬 則子	ワタミ株式会社 執行役員 SDGs推進本部長
矢野 健太郎	明治大学農学部 専任教授

プロジェクト評価を行った委員

千葉 一裕	東京農工大学 学長
-------	-----------

プロジェクト評価の妥当性の評価、プログラム評価を行った外部委員

小野 正人	玉川大学 学術研究所 所長
成田 正人	株式会社 NTTデータ経営研究所 常務取締役
山中 大介	ヤマガタデザイン株式会社 代表取締役

※ プロジェクト評価の妥当性の評価を行う外部委員はプロジェクトに関する評価は行わない。

外部評価結果の概要

PM名	評価	
藤原PM (CPS)	ステージゲート 通過	2024年のKPI達成に向けて資源を集中 CPSの成否は2024年の評価時に厳格に検証。 ※ 2024年のKPI：サイバーフィジカルシステム(CPS)のプロトタイプを用いて、環境適応能を高めた 強靱化イネシステム を作出
竹山PM (土壌)	ステージゲート 通過	2024年のKPI達成に向けて事業計画を精査し、効率的に推進 欧米等との連携について戦略的かつ意欲的に推進 ※2024年のKPI：各種土壌で微生物叢アトラスを完成、「土壌健康度」の概念を科学的に明確化
清水PM (CCC)	ステージゲート 通過	研究を加速 本プロジェクトの強みは「培養肉生産に穀物原料を必要としない点、培養廃液を再利用する点」にある。 時間軸を意識し、優位性の高い要素技術の成果をいち早く社会実装するスキーム を描くことが重要。
日本PM (IPM)	ステージゲート 通過	研究を加速 経済合理性の検討、パートナーの戦略的選定、国民対話 に取り組み。社会実装を達成する観点から 事業戦略を明確にし、具体化に向けた活動 を早期に開始。
小林PM (低メタン牛)	ステージゲート 通過	研究を加速 カーボンのクレジットと連動させた形で社会実装を進める事例もあることから、本プロジェクトの強みと社会変革の可能性をいち早く世の中に示し、 当該技術に基づく事業としての優位性を早期に実証 することが必要。
由良PM (昆虫)	ステージゲート 通過	大胆な目標を設定の上研究を加速 昆虫の品種改良目標に係るKPIの追加 を検討し、国際社会における牽引者となる構想を明確化すべき。
中嶋PM (フードロス削減)	ステージゲート を通過させる べきではない	3Dフードプリンターの競合に対する競争力やフードロスを削減する手段としての位置づけが不明確など、 フードロス削減をターゲットとしたプロジェクトとして不十分 な構成。目標5の達成には、フードロスの削減を正面から取り上げたプロジェクトが必要。
高橋PM (AI Nutrition)	ステージゲート 通過	社会実装の方法を明確にし、実装可能な研究に資源を集中 関係者は、成果を社会に定着させる方法として、収益事業とは異なる方法で取り組むとしているが、その 具体的な方法を説得力があり、広く理解できる形で説明することが必要 。

目標 5

プロジェクトの進捗・成果

(前期 5 年中 3 年目まで)



サイバーフィジカルシステムを利用した 作物強靱化による食料リスクゼロの実現



プロジェクトマネージャー

藤原 徹 氏 東京大学大学院 農学生命科学研究科 教授

ムーンショット

従来、圃場で数年～数十年かかる品種改良を
サイバー空間でデザインし1年で育成可能に

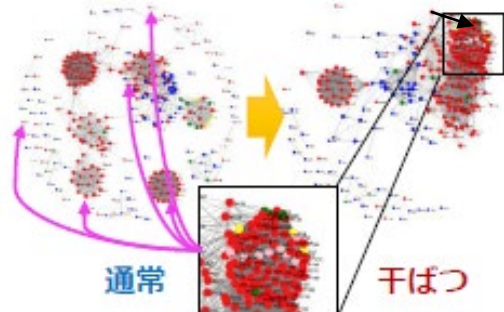
【2022年度のKPI】

・サイバーフィジカルシステム（CPS）の要素技術
（環境適応能を高める原因遺伝子の特定、フィジカル空間での計測データをサイバー空間で分析するプロトタイプ等）を開発する。

進捗・成果：**サイバー空間**で干ばつ耐性イネのデザインを開始



干ばつ耐性関与遺伝子候補



・サイバー空間における発現ネットワーク解析により、**干ばつ耐性との関与が推定される35の遺伝子を選定**、作物の非破壊評価を可能にする『栽培計測プラットフォーム』の完成等を通じて、**サイバーフィジカルシステム（CPS）の要素技術の開発**

・さらには、**3種類**の遺伝子の**同時改変**に成功（世界初！）、品種改良の加速に貢献可能な成果。



土壌微生物叢アトラスに基づいた環境制御による循環型協生農業プラットフォーム構築



プロジェクトマネージャー

竹山 春子 氏 早稲田大学 理工学術院 教授

ムーンショット

**土壌微生物の力で
作物を生産**

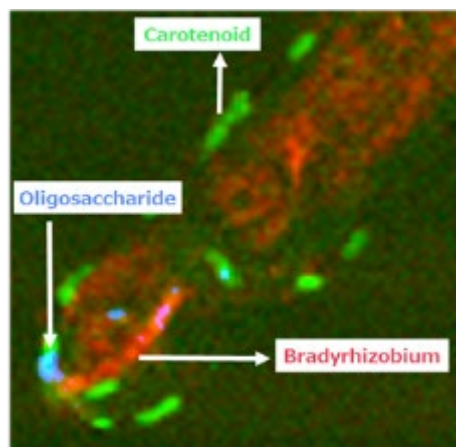
【2022年度のKPI】

- ・多様な土壌に生息する微生物ゲノム情報の収集・解析を行い、データベース化した**微生物叢アトラス**を各種土壌で作成。
- ・「**農業環境エンジニアリングシステム**」の**プロトタイプ**の動作確認を開始。

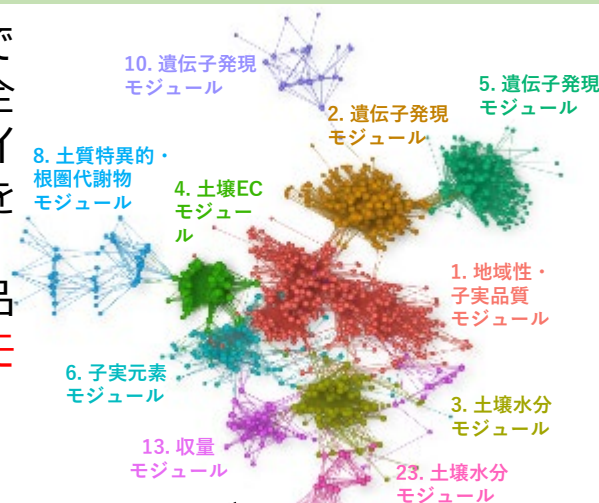
進捗・成果

ダイズの生育段階ごとに変化する**微生物叢**、代謝産物等の『**微生物叢アトラス**』を作成中
『**農業環境エンジニアリングシステム(AEES)**』構築のためのダイズの**統合オミクス解析**を実施

- ✓ 各地域のダイズと土壌約600サンプルの**微生物叢**と約3万の**シングルセルゲノム**を解析
- ✓ ラマン分光により根表面の**代謝産物**を検出



- ✓ 農業をサイバー空間でシミュレートするため、全国の6モデル圃場のダイズの**統合オミクス解析**を実施
- ✓ 農業生態系は地域・品種・土質を反映した**モジュール構造**を示す



→ これらをデータベース化し『**微生物叢アトラス**』を作成中。

→ これらに気象や生育モデルを統合し『**AEESプロトタイプ**』を構築中。



藻類と動物細胞を用いたサーキュラーセルカルチャー（CCC）によるバイオエコノミカルな培養食料生産システム



プロジェクトマネージャー

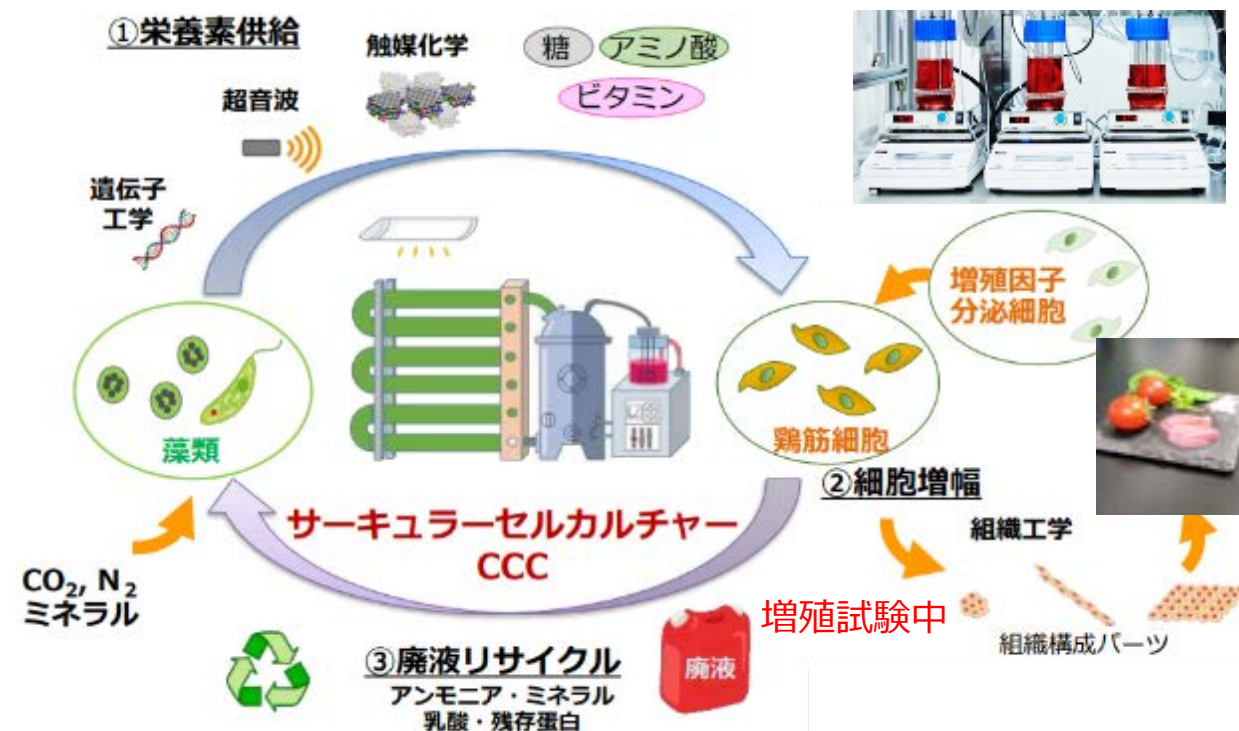
清水 達也 氏 東京女子医科大学 先端生命医科学研究所 教授

ムーンショット **資源循環型培養食料生産技術による食料生産の効率化**

【2022年度のKPI】

- ・サーキュラーセルカルチャーで用いる藻類の分解率>60%
- ・鶏胚筋由来細胞増殖の倍加時間<72h
- ・廃液リサイクル率>50%

進捗・成果：培養食料を生産、培養廃液を再利用するサイクルを達成



サーキュラーセルカルチャー（CCC）の要素技術を開発

- ① **カーボン系固体酸触媒の活用**により藻類**分解率70%以上**達成
- ② 増殖効果が高い**3種**の鶏臓器由来細胞を**組合せ培養**し、それを用いて鶏筋細胞の**増殖試験中**
- ③ **乳酸資化藻類の作出**により廃液の**リサイクル率50%以上**達成

先端的な物理手法と未利用の生物機能を 駆使した害虫被害ゼロ農業の実現



プロジェクトマネージャー

日本 典秀 氏 京都大学大学院 農学研究科 教授

ムーンショット

青色レーザー光など
全く新しい**害虫防除
技術**

【2022年度のKPI】

- ・低出力レーザー光源を開発し、**2種以上の殺虫効果**を確認。
- ・ゲノム編集やRNAiにより改変した**天敵の生態的パラメーター**を室内実験により解明。
- ・害虫に寄生して細胞質不和合を起こす共生微生物を**昆虫培養細胞に導入・維持**するシステムの構築。

進捗・成果

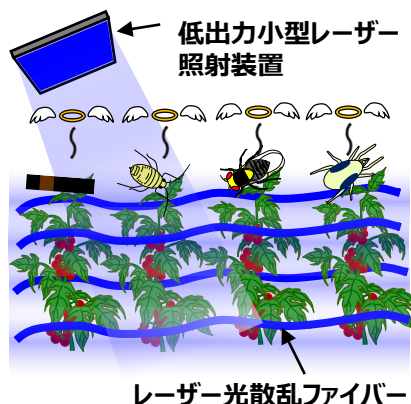
青色レーザー光を活用した殺虫技術を開発

レーザー狙撃



【特許出願】飛行位置予測方法
位置、姿勢角、翅のはばたき周
波数、翅の向き、両翅の角度など
から、**0.03秒後**の位置を予測

拡散照射



- ✓ 飛翔する害虫をリアルタイムで検知・追尾して**レーザー狙撃**する技術を開発。
- ✓ 微小害虫に対する青色レーザー光を活用した**拡散照射による殺虫技術**を開発中。
- ✓ 改変する天敵の**行動量**（生態的パラメーター）の測定方法を開発。
- ✓ 共生微生物を**昆虫培養細胞中で維持**する培養・保存技術を開発。



牛ルーメンマイクロバイオーム完全制御によるメタン80%削減に向けた新たな家畜生産システムの実現



プロジェクトマネージャー

小林 泰男 氏 北海道大学大学院 農学研究院 特任教授

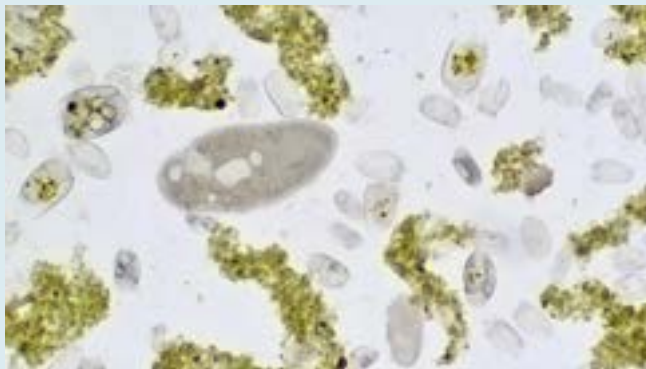
ムーンショット
牛の反芻胃の**細菌叢のコントロール**
げっぷメタンの削減と生産性向上の両立

【2022年度のKPI】

- ・低メタン牛に特徴的な細菌のうち、**未培養細菌の分離培養**を実現する。
- ・ルーメンにおける**VFA センサ測定条件**を決定する。
- ・**メタン抑制候補資材**のメタン抑制効果を**牛で評価**する。

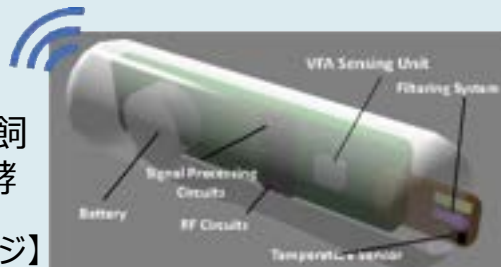
進捗・成果

げっぷに含まれるメタンを減らす菌を分離、特性を解明



【牛の反芻胃の内容液】
動き回るプロトゾア、細菌が飼料片（緑色）を分解、発酵

【スマートピルの最終開発イメージ】



- ✓ 低メタン牛から分離した**新規プロピオン酸増強菌**が、プロピオン酸**前駆物質**を大量**生成**していることを確認。
- ✓ プロピオン酸増強菌と関係する微生物を探索し、**サポーター菌候補**を抽出。
- ✓ ルーメン内に留置するスマートピルの**透過膜**、0-200mMの**VFA（揮発性脂肪酸）**を測定する**センサ素子**を開発。
- ✓ メタン抑制効果のある素材について、**牛試験**を行い有効性を確認。



地球規模の食料問題の解決と人類の宇宙進出に向けた昆虫が支える循環型食料生産システムの開発



プロジェクトマネージャー

由良 敬 氏 お茶の水女子大学基幹研究院 教授

ムーンショット

優良形質をもつ昆虫品種を作出、**家畜化**する。

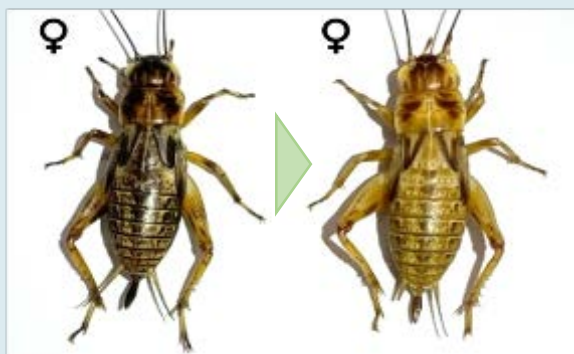
【2022年度のKPI】

- ・コオロギについて、家畜の日本飼養標準に追加するコオロギ版飼養標準の策定に必要な**飼養管理技術の開発**、飼料・食料として必要な**栄養価**、**安全性評価**等を行う。
- ・ミズアブについて、①品種改良とその優良形質評価、②**養魚用試験飼料の試作とその栄養評価**等を行う。
- ・シロアリについては、家畜飼料としての**機能性の解明**を進める。

進捗・成果

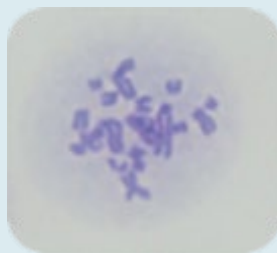
コオロギの体色をコントロール、食用家畜化に道筋

WT(野生種) KO(ノックアウト)



【淡色のコオロギ系統を作出】

外骨格の体色を制御する遺伝子のノックアウトにより色素が抜けた系統の作出に成功。



【コオロギ粉の食品安全性評価】

染色体構造異常は見られず (in vitro染色体異常試験)。

- ✓ 昆虫の加工適性を高める白色化、ソフトシェル化に道筋。
- ✓ マウスを用いて、コオロギ粉の安全性を確認。(経口毒性、慢性毒性、染色体異常等)
- ✓ ミズアブでマダイ飼料中の魚粉を50%以上代替できることを確認。
- ✓ オオシロアリをブロイラー飼料中の魚粉の代わりに添加 (2.5%添加) しても、成長に影響なく、鶏肉中に機能性(抗老化効果等)成分が増加することを確認。



フードロス削減とQoL向上を同時に実現する革新的な食ソリューションの開発



プロジェクトマネージャー

中嶋 光敏 氏 筑波大学 生命環境系 特命教授

ムーンショット

未利用農産物を保存し3D-FPにより**QoL向上食品**を提供、ムダのない合理的な食料消費

【2022年度のKPI】

・パーソナライズド食品の製造に必要な3D-AIシェフマシンの基本設計を完了する。

進捗・成果：栄養・機能性、おいしさ等に関するデータを登録、3D-AIフードプリンターで出力する基本システムを完成

統合DB

粉体・調理特性

おいしさ情報

3D成形特性

テクスチャー情報

栄養成分情報

健康情報

入力

(栄養、嗜好等)

AI

出力

(デジタルレシピ)

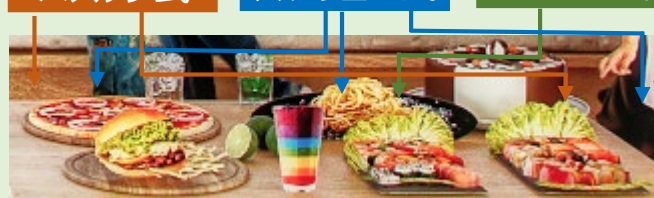
3D-AIシェフマシン



バスタブ式

スクリュー式

パウダー式



食材粉体



軟らかい ← 食感 → 硬い

バスタブ式用 スクリュー式用 パウダー式用

3D-AIシェフマシンの基本設計に必要な要素技術を開発

- ・おいしさの可視化に成功し、データセット（栄養、粉体特性、おいしさ等）をDBに登録
- ・健康状態に応じたレシピをAIにより10秒以内で出力見込み
- ・スクリュー式3Dプリンターを用いて、デジタルレシピからの出力（成形）を達成



自然資本主義社会モデルを基盤とする 次世代型食料供給産業の創出



プロジェクトマネージャー

高橋 伸一郎 氏 東京大学 大学院農学生命科学研究科 教授

ムーンショット

採血なしに**健康状態を把握**し、**健康寿命を延ばす食品**を提供

【2022年度のKPI】

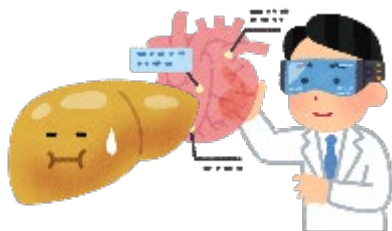
- ・血中**アミノ酸プロファイル**と生理状態の関係を解明する。
- ・ヒトに近い栄養評価が可能な**老化加速ピッグ**を作成する。

進捗・成果

➤ **血中代謝物プロファイルのみで健康状態を把握できる可能性を実証**

血中アミノ酸プロファイルのみで疾患の有無の判別に成功

⇒**継続的にモニターすることで先制医療の実現をサポート！**



分光分析で血中アミノ酸プロファイルを推定することに成功

⇒**非侵襲(採血なし)で血中アミノ酸プロファイルを推定可能**



老化を抑制する遺伝子を欠損させたピッグを作成

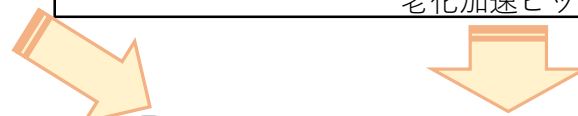
(ピッグは生理学的にも解剖学的にもヒトに近い)

⇒**食品の栄養素等と老化の関係解明が進展**



世界初！

老化加速ピッグ



**健康寿命を延ばす
未来型食品の提供**



PM名	評価	
藤原PM (CPS)	ステージゲート 通過	2024年のKPI達成に向けて資源を集中 CPSの成否は2024年の評価時に厳格に検証。 ※ 2024年のKPI：サイバーフィジカルシステム(CPS)のプロトタイプを用いて、環境適応能を高めた 強靱化イネシステム を作出
竹山PM (土壌)	ステージゲート 通過	2024年のKPI達成に向けて事業計画を精査し、効率的に推進 欧米等との連携について戦略的かつ意欲的に推進 ※2024年のKPI：各種土壌で微生物叢アトラスを完成、「土壌健康度」の概念を科学的に明確化
清水PM (CCC)	ステージゲート 通過	研究を加速 本プロジェクトの強みは「培養肉生産に穀物原料を必要としない点、培養廃液を再利用する点」にある。 時間軸を意識し、優位性の高い要素技術の成果をいち早く社会実装するスキーム を描くことが重要。
日本PM (IPM)	ステージゲート 通過	研究を加速 経済合理性の検討、パートナーの戦略的選定、国民対話 に取り組み。社会実装を達成する観点から 事業戦略を明確にし、具体化に向けた活動 を早期に開始。
小林PM (低メタン牛)	ステージゲート 通過	研究を加速 カーボンのクレジットと連動させた形で社会実装を進める事例もあることから、本プロジェクトの強みと社会変革の可能性をいち早く世の中に示し、 当該技術に基づく事業としての優位性を早期に実証 することが必要。
由良PM (昆虫)	ステージゲート 通過	大胆な目標を設定の上研究を加速 昆虫の品種改良目標に係るKPIの追加 を検討し、国際社会における牽引者となる構想を明確化すべき。
中嶋PM (フードロス削減)	ステージゲート を通過させる べきではない	3Dフードプリンターの競合に対する競争力やフードロスを削減する手段としての位置づけが不明確など、 フードロス削減をターゲットとしたプロジェクトとして不十分 な構成。目標5の達成には、フードロスの削減を正面から取り上げたプロジェクトが必要。
高橋PM (AI Nutrition)	ステージゲート 通過	社会実装の方法を明確にし、実装可能な研究に資源を集中 関係者は、成果を社会に定着させる方法として、収益事業とは異なる方法で取り組むとしているが、その 具体的な方法を説得力があり、広く理解できる形で説明することが必要 。

目標 5

プログラムに関する評価

- 「ムーンショット型研究開発制度の運用・評価指針」の評価の視点に沿って外部評価（プログラムに関する評価）を実施
- 評価の視点を「目標」、「マネジメント」、「連携・対話・発信」に分類

目標	1-1. MS目標達成等に向けたポートフォリオの妥当性（①）	10のプロジェクトを8に集約し、各々の進捗状況を把握、特色を評価し、内容に応じた強化、修正指示を行う 仕組みが整備 。評価を踏まえ、PDの判断と指示により事業資金の執行を留保するなど 緊張感をもった運営 。
	1-2. プログラムの目標に向けた研究開発進捗状況（②）	プログラム全体として高く評価 。PDが絶えずPMに対して潜在する シーズを見逃さないように呼びかけ、良質な研究環境の保持に努めている ことが良好な進捗につながっている。

※（ ）内の番号①～⑪は、「ムーンショット型農林水産研究開発事業令和4年度評価実施要領」別紙1の2.プログラム評価の「評価の視点」の番号である。このうち、①～⑩は、「ムーンショット型研究開発制度の運用・評価指針」の「評価の視点」に示された項目と同一である。

外部評価結果概要（目標5プログラム全体）

2-1. プログラムの目標に向けた今後の見通し（③）	必要に応じ、プロジェクトで与えられた研究成果を交差し、 シナジー効果が発揮することを期待 。PDは、国際情勢、海外の類似事業の進展にも目くばせし、プログラム全体としての事業の新規性、成果の実装化の見通しに 安定感 。
2-2. PDのプログラムマネジメントの状況（④）	PDは、研究者としての立場からの独創性と学術的新規性、教育者としての立場から若手人材のエンカレッジメント、そして起業家として成果の社会実装の3要素を バランスよくPMに求め、多様な視座からプログラムを俯瞰 。
2-3. 大胆な発想に基づく挑戦的かつ革新的な取組み（⑦）	緊迫した状況を孕んでいるにもかかわらず、日本国民の食料危機に対する意識は低い現状の中で、 従前にはなかった大胆な発想の展開で、事態を回避しようという意欲 がPDのプログラムマネジメントから感じ取れる。
2-4. 研究資金の効果的・効率的な活用（官民の役割分担及びステージゲートを含む）（⑧）	研究成果があがりはじめ、 マスコミ等から注目 を集めつつある。自己評価だけではなく、外部からの客観評価を見据えながら、様々な属性の組織にアピールを試みている。今後益々、 産業界との階層的な連携 を試みられることが期待。
2-5. プロジェクト評価の妥当性（⑪）	プロジェクト評価の妥当性は高い 。プログラムを構成する8つのプロジェクトの成果は、学術的新規性、独創性、社会実装性など様々な視点から分析され、多様な属性をもつ評価委員により、偏りがなく総じてバランスの良いコメントが与えられる体制。肯定的あるいは否定的な指摘は、ムーンショット型研究事業の趣旨に沿って公正に導き出され、プロジェクト評価に提供。

外部評価結果概要（目標5 プログラム全体）



連携・対話・発信

3-1. 産業界との連携・橋渡しの状況（民間資金の獲得状況（マッチング）スピンアウトを含む（⑤）	アウトプットは、期待を越えて 与えられており研究事業としては 高く評価 できるが、ムーンショット型研究事業の特性から、その成果が革新的な社会実装的成果として成就するかという観点からの 評価（対費用便益）は時期尚早 。
3-2. 国際連携による効果的かつ効率的な推進（⑥）	PD、PM、PIと、その活動を支援するBRAINが一体となって、国際連携をどのように行うのが効率的かを考える姿勢をみせている点は 高く評価 。日本がイニシアティブを発揮できるよう 適切な情報管理を行うことを期待 。
3-3. 国民との科学・技術対話に関する取組み（⑨）	PDのさまざまな属性への国民との対話の場を作る 惜しみない努力 と、それを綺麗なホームページなどの作成を通じて支援するBRAINとの チームワークが機能 。
3-4. 研究推進法人のPD/PM等の活動に対する支援（⑩）	研究者グループとともに当事者意識をもって多面的な支援にあたり、PDとPMの掛かる事業活動が 立体的な構成となるような運営 を担っている。 全体として高く評価 。

目標 5

今後の方向性

1 ポートフォリオの見直し

外部評価等を踏まえ、ポートフォリオを以下のとおり見直し、目標達成に向けて実現性の高い方法をとる。

- 「食品ロスゼロを目指す食料消費システム」の目標達成に向け、フードロス削減を正面から捉えた複数の研究提案を新たに公募することとし、フードロス削減をターゲットとしたものとしては不十分な現行の1プロジェクトは中止。

ポートフォリオの見直し

プロジェクト名【PM名】

サイバーフィジカルシステムを利用した作物強靱化による食料リスクゼロの実現 【藤原PM】

→ **継続** CPSの成否に資源を集中

土壌微生物叢アトラスに基づいた環境制御による循環型協生農業プラットフォーム構築 【竹山PM】

→ **継続** KPI達成に向けて計画を精査、効率的に推進

藻類と動物細胞を用いたサーキュラーセルカルチャーによるバイオエコノミカルな培養食料生産システム 【清水PM】

→ **継続**

先端的な物理手法と未利用の生物機能を駆使した害虫被害ゼロ農業の実現 【日本PM】

→ **継続**

牛ルーメンマイクロバイオーム完全制御によるメタン80%削減に向けた新たな家畜生産システムの実現【小林PM】

→ **継続**

地球規模の食料問題の解決と人類の宇宙進出に向けた昆虫が支える循環型食料生産システムの開発 【由良PM】

→ **継続** 品種改良に係るKPIを追加等

フードロス削減とQoL向上を同時に実現する革新的な食ソリューションの開発 【中嶋PM】

→ **中止・再公募**
フードロス削減を正面から捉えた研究提案を公募
これまでの成果は引き継ぐ

自然資本主義社会を基盤とする次世代型食料供給産業の創出 【高橋PM】

→ **継続** 社会実装方法を明確化し資源を集中

2 プロジェクト支援の強化

R6年度目標の達成を強力に後押し

- (1) R4年度から措置している PD裁量経費 を活用し、新規／有望案件の機動的支援、国際連携の加速、研究成果の発信、双方向コミュニケーション等
- (2) ラウンドテーブル を活用し、プロジェクトと対話を進め、社会に定着した姿や事業化モデルの作成等 に取り組む。
- (3) さらに、我が国が海外に依存している 肥料 の再利用や吸収効率の向上について、実現可能性を調査。